孫金貞傳志

初編

拾弐

へ遠13
2475
12

門 へ遠13
番 2475
巻 12

繪本見聞志廿編巻之拾弐

曽我十郎祐成究朝の事
五郎時致生捕るゝ事
大友能直[illegible]感状の事

繪本見聞志廿編巻之拾弐

目録

一 曽我十郎祐成究朝の事
一 五郎時致生捕るゝ事
一 大友能直[illegible]感状の事

鎌倉殿実録巻之拾弐

十郎猪熊家朝の事

去程に曽我兄弟の者ども死地に入て働きける面目を顕はしの死亡みなふぶ中に多くの時夜の事実者知まと紛て定て大磐なんとて向て後屋にもり出て横へ

んと云ものゝ多く漁人の市郎人等
兄弟の為めなるのみまさまさまて事ある
ども猶ほ何彼の間に同力りうもあれば
庵中俗の事といへども多きなるか
為めに酒宴を催ふし夜更まで
行そびあるもまたしばらく寝入の時
あるべからまく起るといへども多くは
前後をとりあつまして強ぎ物語り

る面くちりゆきて高雷音と出てもち
ども同じ所をとりめぐりかゝる事
四日ばかり立て死を顧て切まるを
りしかるに行て忍まおりひさ
あるべきかとおもふ事なれ
けれ三浦古肥中ぞ小事もて
ざる面兄弟鬼神のごとくなれ
まことのひとも自分の心ばかりなるべく仮

屋くゝ猟師をそうして其人を
出さるゝ事ゆゑ兄弟ふたりゆゑ大きに
驚き出て人をあつめ大勢なりしゆゑん
しゝ場目み年そひのあるかりを出して
見事なる狐の毛皮を松明にて焼のゝ
ゝ狐なる振舞あるかと呼ばるる
ゝ見物と呼ばるゝ所の清厩の舎人
小さらき者にて傘を大をつけ大路

一投出一驚くの仮屋ゝゝ見物として
動もしゝとこの出さる場後なんとよ
火を射ゝいとりもの投出ゝ
を同み流士の陸ゝゝ松明をもせらべ
数多の火をして忽ち白昼のごとく
火の光りをかゝ武蔵の国乃須新
開義次郎忠氏進ゝ出ゝ曲とのい
くゝあまたゞして狐の毛ゝゝん坂

東方おのく一揆蜂起して新
開発流命をうり迷て出て猪鹿也
よと唱りしかども前法成体是なる
場もあまたぶくるまとび歌よ夢とりの
らせいろくらに牡鹿ぐまや見蹄多
しこ玉ちく今まで閑安迷ると
も恥辱為るべし完ふ形のごく
自分とおのく曠の場所なれば法

迎ひるの沈思迷きかるる等事ふ暗
屑せんと大方ふりなげるそびかるるの
暫く前のおりるとしかりしかども廣会
みも似も流命ひかる迷て
惜き狂歌との道ともまづと迷てみ
しよ新年をげく迷まして全宮ぬく
舟を踏さんとするる数多の火把う
らりくよふ法華垣を踏ゆり

る迄しるまもなく迎迎てゆく甲斐なの
国の住人市門別当次郎光とのく
くきゝ手勢多ゆくふるまひうれ時
夜のまぎれに浦うち怪事もと
ひとへに自宅国府の勝負の高き
うりんきうもあり時に川うち
乗り時彼とまりとも原小瀬り
て走り出げ山さき向ふる様也

所同彼とゝ乱れ有八郎ゆるぞを廣
云を返原猪角也と向ふ深ゆる
友切丸を稲妻のごとく振ひ唯ひと
打切るかる別当次郎薬丸相遂
し思ひ切りひしりとまるぐまを二ちち
三打弾ひしぐ腰のつぐひとゆるうち切
ゆれ左右を打ふ退ぞまるる高
も一両ふるゆび海中数第四

火把一条を海へ元の時度とかり
ろる事いとゝおそまき出るものか海
動き始ぶしまたび將軍新朝臣怪
しまの海へ出て諸士の役屋を上使を
立てまた猫の精ものゝ唯一人ゝ天の
半ばるみ今まで出捕ざるハ何事
そやまた猫ゝと作也觸さも
らる是ものゝ今まで出ざる事を
不審討えんと用ることを決中ゝも
伊豆の國乃伯人紀國四郎忠常武
蔵国ゝ猫獣ゝ者の
ものゝまたがる猫を受ゝ一事ゝ
出る出海ゝまたゝ兄弟ゝ父河海
の三所狐父狐親法師ゝ若年ゝ
祈りあれゝ変ゝ向好ゝ恩
ひ完和ゝ出ざり既ゝ上えある

うゝ捨て置まじとて呼分のようゝ
ぞの如くらまとて拔て只一人出来り
給ひ其方の流中に行方ありや
信田殿忠常と兄弟と呼
つゝばせしき其の出家時致し園原の歌
を返歌其方一所生りて猪熊
一人なるゝ絶わひ
らしや信田殿別ハ猪熊

より入魂の好身あるゆゑ
も好きあるとひ猪熊ゝ筒と海
迎も惜ゝ次第ひ詠もうゝ
猪熊を遣まかそべまでや
ゝ忠常ゝ乃ぶと云を
もひとも死とも情ハ遣
まゝ七人を人合和尚をとゝ合浪
お鞍ひ中ゝ明方迄宮ゝ

ゐ左方の御方へ参りて
右掌を手もとの功の方の結跏
両手をさうの第七指に向て前返へ
身体きつる業をと弾き鉢ひ
は結跏趺坐の御きを心神掌をて
うへ左方より沈へ落る向てをのうち
四りしの大方をひらて打指を高
風ことをいとでも陽りは解くり切らる面へ

消えうるのきを打ち光教方
結跏趺坐の岩屋を叫ける知を
忠実分へ指をぐりしぐ結跏趺
りの足と切高て結跏趺坐で倒
まぐ岩屋抽ち忠実の服のあ
りと切分らのもの両ぐ足をもも
七度左方取出十方右の腰を打落
しとこと忠実引返さんとは

ふと猫が変りけり。情深き猫どの
なを首を取のけざるや捨て立て下前
のまよ海へ取厚手と第一せんとのる
物ゝ勝負ともせずぶ情なきけ迷ひ
ゝ首打ゝ死海の取厚手とてぎの
まゝ一ゝ中ゝ忠常ともいもと
ゝ物ゝ上云のおもひまゝ上て唯
猫の指を法ゝんゝのゝ同好ゝ

ば首を丸まで出せゝと心ゝ弟ゝ
実をしゝものゝれの命ゝ物人ゝ
首を海へべきみゝ物ゝ源兄情のゝよ
ゝゝるべゝれども親今あれとゝるゝで
猫ゝゝゝ第ゝ部ゝ兄弟知ゝよ
ゝ父の他云と離ゝんゝのゝ心ゝ御ゝと
を通ゝゝ死ゝんゝと兄情ゝを寛ゝま
来の用云ゝ第ゝ法ゝ新ゝ

まづ疾より観念をもつて処好り今日
唯今年来の富を捨てんとすれども
命なる綱を好うしう為や下所患
為かり死死をさぶさんうとそれを
心かりしうみ生涯の中を過りて死
る本事のまり事業の迷ひ御年
そのへ貧を訪のへと大ひみ悦びを
もかぬ患者をもつて感ぶら

くるかしかぬ苦痛をもつて之四
りけるみ貧を訪かり法師を
大二家業を富を生涯をまさるを名
八法代をまりて者子乃澄と呼
事ーを見び稀なる若をのり感
ぶものハりうり

土斉問致生捕ーー
仁岡四郎患常ナ所法師貧を

うち四郎が完朝の一句を遂げ
四方より寄せ大勢の人々の見物
のごとくなりける所に新蔵と
仁田四郎忠常が討死なりしと
ゝば強勇にて世かくれなき
なり天晴なりしと哭する時致
訪ひしに死骸の粗ひよ清ぎ
出金を有り一大刀いづくよりと有也弟の

ありしを新蔵討ましと吹よう兄信
の手にとゝ云ひ合ひ高聞を家に教ま
あいて兄弟一所に約せし事なれば
兄弟の出生の時分の諸と事よ
て切腹せんと云ひ来り兄の死骸を
見るにつけも皆りたる有様なれ
八幡宮に向ひ申し訪ひ奉り涙
と打ぐるる者ども清水に追付き遂

の沈清（ちんしやう）つゞまろしてなげく後（うしろ）鵜丹（うきとね）弟（よわち）
曽我（そでこと）素（そで）去（きやく）り出前ハいけくみ所ぞや
兄（あに）が究竟（さいご）見手（き）おくれもして爰（さゝ）生（うせ）り
其のたいん拘（さて）く往痛（つう）のふるまひりけ
追（ちつ）けて打（うち）とめんとひとり咲（よう）り言（こと）
まぐ時致（ときむね）是（これ）を見て大（ちく）ひみ怒（いか）り激（ろうぜき）とん
らひ出前時致（ときむね）ハ一何國（いづく）まで落（ちく）
行べき追（ちつ）くるまで夜（ちよ）が次精（せい）顔（み）せてよと血（ち）

刃（やいば）とふりて飛（とび）かゝれば鵜丹（うきとね）ひらりとくり
跡白（ちしろ）き鞘（まき）を外（りや）し時致が足元（ちしもと）をみたり
しとらへ次廣（ろうりうん）か吐火（しつきう）ふ討（うつ）て出（そで）けれ
しけ太刀（たち）抜合（ぬきあはせ）て追（まで）てもむらく陽（ちうま）りの恐（おそ）
ろしさみ踊（ちし）りありけり迎（まげ）へ行時致（ときむね）
いよく怒（いか）りを成しちもひけく迎へる今（ま）
の悪口（あつこう）言（こと）としら次郎（これら）ホが黄金（わいど）の伏（とも）さ
せんして草鞋（いく）ぢん太刀（ちん）こりりよりおけりけれバ

与市と魂を奪ひ合ひ
感賞は追腹まで
ばしとおりひとりなる場にて思案
を将軍の出所中を迎ひ参る時致さ
ひくまでものがてまづと呼ひかる
つかる与市いよいよ高き将軍の
出所をきつと走り寄る時間もや
おりひとり出侍所の幕を抜んぐ出まと

ふるひ〳〵迎ひ参り幸き命と悦り
る時彼を殺ひ参るまで迎ひ参
そ将軍の出所なるべし新ふ所のさ
ひとりうるおいまで死ぬ命遂げ
なるも一太刀報ひ中さんと同丹後
く幕刎のけ奥を開けるもり也
き既み将軍の出所迎ひ強剛なよ
ひ〳〵朝与大ちりて出もりひの

んとするまふ所に大方九郎義経
独東に一人残りゐる事を聞
智勇兼備なるものなりしが若の母
を乞ひ給へ若さまさしく四海の武将と
してさしも奢まる平氏の大敵なら
居ながら源氏まで残る
東国の推参せしかば強
勢を張り中間しとて大方九郎義経

独東に参り給へ
作りて呼らるべき宿直の武士
あぶざるとて多勢
所中をびき渡り
子問ひ出厩の小舎人
荒馬安の名人にて大力無双の荒
のうりし問後が迫
安叩びき倩みひろ
居とも張り出所

河内国井を過ぐ。將軍の御所
推参し、丑前九を見て、女房と思
ひ、暫く見て、十前ぐ推参入る。あ
もむく女房と覆るゆれて中せて
丑前を、うん形ぐ太
刀の鞘にて一番打て、きり切丑前九
つきぶしやりて、前後ひしりて脱る
もがきたり、ふらく、河内と

ぶりと抱き、河内致、ぐ、ぶき振
切り、女房、ぶりひ、沈て、ぶ、ぐ、ぶれ
突、ぶ、ぶりして、放さんと、丑前九
大力の、ぶ、有河内、ぶ、ぶ、ぶ、將軍の、ぶ、
の、ぶ、ぶりして、四、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
まり、丑前九を、ぶ、ぶ、ぶ、丑、ぶ、ぶ、ぶ、
さ、ぶ、大力の、丑前九、ぶ、ぶ、河内、ぶ、
の、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、

夫婦ともに思ひたち吉野の中雅楽丸
御ものを五郎丸ら組合せ出合
と呼はりうるゆゑ吉野丸雅色
の里丸同源蔵ちゆゑ屋敷の内ものの
大勢人だらけとなり時後の前
後左右組合り中も雅色
源蔵ちゆゑ時後ら刀持る加ひ
みなとものと抜組るゆゑ右方とう

だひとる時後刀とうもで以車輪のしき
腰をいりしゆみ叫ん雅色里丸と右
の方にて源内と遊りの屋敷前
暫くゝ正意付さりる源蔵弾丸
中右と右組付ゝと時後乗ちもセ度
ちくらまし腰をもぎ敬ゝ黄人分弱
後右中抜カ抜のけりうこの
ゆゑ中ち立所丸るとも敬さて時後ら腰

を抱きかゝるものの先を申し聞まとゝ
ひしゝ雑色申さるゝ前に申さるゝ人々とき間
る〻時致し組打ち源兵衛尉申さるゝ
なりてかゝらんと思ふ前に致今をかぎ
りの働きなるべし所領主の前
るどとゝ申さるゝ組まとゝ引ちゝ
二三間ばかりとゝ逃のとゝめる間
かゝどもゝ踏張り投賀一枚ぬきぬい

角る西の時後行ゝと帰り角とゝ
ゝ出る人の顔ゝの見ゝ見ゝ出ゝ
うゝみゝ宝ゝ絵ゝ時後ゝ出
る大友殿出ゝ完ゝ
ゝとゝ働きゝ同角ゝ出ゝ見
ゝてゝるゝ所ゝ時後ゝ出
ゝ逃ゝ出ゝ
朝ゝ神ゝ

〻彼が面謁を乞ひ其の相伴人共
中に新の五郎と云て迅の出雲実
政を始め何彼と新を欺ける既に発覚
遂に何れも死生捕と成て
僧と落びける

大友紋也正感覚の事

夜者を遣こりて彼方へ暁よりまぎれ
なき様に家の内の侍屋敷

訪とる事大変出家人のうちあ
ひとり府を離しともあり
亡みおよび絶る郎人のたち先を討死
屋敷人皆り以の乃海手をりしば
十所八幡四所惣を討ふまと
出所何彼を出所中にて生捕まとり
ば暁みおよんで諸士の侍屋をもとめ
り屋敷を無拠思ひ

奥州にて今は論なく岩屋の上なる
心地なり将軍頼朝は錦戸か討まき
なるよしと内房ありし御所の皆の
者どもは殊はおしくおもひけしが其のこゝ
ら原吉備津の宮の大春日左衛門にて
討ましきよし吟口も准す疾本
聞み阿ろべきてみ河由物はされりて討
し申と内々雲なり先祖度を告し

両人の死骸とあらためかへんと侍所
別当和田左衛門尉義盛梶原
平三景時両人御使にて腰越
みかはりなき錦経大庭景親か死骸実検
しけるに平三景時大きに感じける
頼朝の御事にはふ申入すかしけり見
事なり切なるものゝなけれども
あつまにて此頼朝は御ましくて申さん

稚児より後の縁ありて刀を御覧ありけるに
べしとて十郎祐成が持たる太刀[illegible]
より折れたると信田四郎が持参せし
上りける時二振の内彼の太刀は大友能[illegible]
受取りて若党[illegible]御前[illegible]
御[illegible]御覧ありて[illegible]思召
[illegible]御[illegible]の体ありて[illegible]御[illegible]
[illegible]仰せ出されて[illegible]

彼兄弟二人の働き[illegible]のきはを
たと[illegible]無理[illegible]の太刀の
徳[illegible]の[illegible]中[illegible]
[illegible]せし[illegible]の[illegible]
[illegible]せし[illegible]
加へ[illegible]止め[illegible]
立[illegible]若年
[illegible]令[illegible]三大[illegible]

なりと申感まゝ〳〵出家又親類よく
散〳〵言て迎ひとて掃部頭親類
宮わけ〳〵と言さゝやき市郎兵衛
くゝる物まゝ河井与市重基河後
ゝ迎ひ〳〵大勢とも人数沢山迎てうしろ
狂病和尚の沙汰あまりさん所中に
迎迎〳〵うゝ言ふ沙汰あるさぶる所に
かけ入て合とうもとうし第三沙河内

の腰掛の者ゝ迎迎て直河後市郎よ
推参〳〵梅若様よりおくびと言ふ怪
の如ふ形と始りのひ郎何よ重基と
言いまうゝ掃部頭重基と言ふ
のひ所頭要〳〵没収〳〵殺とべきむ
上ことゝ御ゝ所あくまゝ市郎
り居て君の出前〳〵由ものとなく
事出忠ゝ狂病ゝ乳みゝゝざる

強ひて大友殿の御娘と申す
の遠とてまゐらせ給へ独身と申す物思ひ
くらるる譜とまうしまゐらせ給へと感じられ
ける柳と申す独身とて中ハ実と牧朝臣
の所へ参らせ給へ牧朝臣いまだ少将の官にて
ありしが大友四郎殿の聟と宮
仕へ給ひしかば独身よりおとり
所へ改めて牧朝臣と比翼

の如くにあり元より改て嫉妬ふかき
女性なりしかば牧朝臣小弾の世語まゐり
居られし事を彼是と怪しの次第
無長なる事を語りのひ無長なる計
して宮仕へ彼女の父左衛門尉殿より
物語りなされしかば絶嘉と牧朝臣
物軍とうち申しかば心よりの如
いかなりとも絶せ給へ男子出来

ありしうらも世をゝ悔うて出家の身
を思ふて出家して出家清らかに内日と
なりのひ〻ぶ時えりて神仏の清浄な
ゆ〻しき事にとぐりて出家し給へ
出家入道ひとりを思ふべ
さしらも改て出家とて出家
備ちういよ〻嫌なりき由今更白
地ゆ御暇ゆ神院の次宿祝能
芸子もとと波男子とやさしかる親
能君の出流のとと切みて十一歳
の御り祝能君乃出家和よりて出家のみ
を顧みゆ出ゆ数ともらば新朝そ
のことと性ものひ成人のふん名ます
まきとの御も祝能同道して出りれば出
前通ゆ名出らしれ女方の苗字と能
らし大夫方道將祝能と名しのひ

杉を釈迦敬信すべきもとと命じ
らるる由釈迦を用得道ときらち
めまとび池分の道をかしく武道も
又勇猛なり此由を歳長して智勇
備人と称ぶ若の思ふ所ひろる由
らのつひ所を釈迦敬信の指図
ぬ是桂京亀岡の別当通の学問
ありて後国法を釈迦の国ふ見よ

明ちの和歌もべきより伊勢物語
猟師見る所ある由なり山猟
大友家の元祖と大友三郎とい
ふ事なり

藤会見雲上花見和編巻十二終